



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	国民社会の研究 第5巻
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Description	『鈴木栄太郎著作集 7（国民社会学原理ノート）』を出版した際のソースとなった原稿である（同書内での言及による）。
Issue Date	1959-08-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77634
Type	manuscript
File Information	I008_015.pdf



MADE BY YAMATO NOTE CO., LTD.
USED SUPERFINE POOLSCAP MANUFACTURED IN JAPAN

NOTE BOOK

國民社會の研究
第五卷

昭和二十四年八月七日

富士△

YAMATO NOTE

口民の集塊の様態

全口民が一つの社会は統一として具
体化の結果として片々様態に如何。
口民は家族団を形成して居る。
その家族団が居住を近づけて
近けを二に近づきを作り、近
隣団が合して集塊地を形成
して片々。集塊地を形成するの
必要のみに皆上層の集塊の
支配下にあり、何故かの上層団は
を経て口民に統合して片々。
口民には全口民の集塊地が接つ
かの層に分れて居る。

銭つかの

宗族が集まると一房をなし近隣

と云ふ房となる。近隣の房が銭つ

かや集まると東郷党とかの大々な

房となり。可见哉と云ふか銭つか

集まると大々房となり。更にそんな

大々な房が銭つか集まるともっと大々

な都市を中へに大房を形成し

かくの如き大房の銭つかが口都

を中へに一大臣大房をなし

片一の大口民衆と云ふ。

口民は一大臣大房をなし生房

の根幹を中へ都市においず。

中一都平の常枯は直ちに枝端に
も影響す。近接する隣の枝の
常枯は余り影響はない。枝端
の常枯は根幹の影響はない。
根幹の影響は直ちに枝端へも
及ぶ。

口良研の心もそんな感じである。
あろか。

根幹が枯れ、は直ちに枝端も枯れる。
根幹より枝端に送り出すものは純
治平和秩序である。それか直ちに
くたのつもの枝葉より根幹に送

よまは中央の生活次第である。然し
一つの枝が送うたことも他の枝が
送う場合が多い。

高田博士の全体文と余の口説文
 高田博士の全体文は大抵に口説
 と此の範域を同じくして其のと云ふ
 か余の口説文は嚴格に口説と
 その範域を同じくして其のと云ふ。

(大坂大学文学部創設五十周年記念論文集
 五五八頁(氏口説文の範域を
 的概念として)

口宗の空井

口宗は空井にあり。最大の武力組織
を有するもの（それを一般に空井者）

と云わば口宗は空井を有する組織に
~~空井~~ 持するものに秩序を維持せしめ
て片も秩序ある口宗統治である政治
である。

口宗統治の組織は古い時代から
出来たもので、新しき、空井者は
口宗を平定して統治の組織を新し
く創り出す仲間ではなく、新事ある
口宗統治組織にかけ、空井者の空
につけはよめる。

故に主権者の治を以て民の治を以て
成多きものにはあるが、口民統治
の権能が主権者に先立つて有るべきものか
常であるから、口民の治は主権者に
先立つて有るべきものではない。
主権者はその能に先立つて口民を
統治し得るものにならねばならぬ。
口民統治の形態としては主権者が新
己の内に口民に服従を強制し得る
したのであるが、中民が主権者が自ら
心を盡し得るなり統治し得るなり
を擁護するなりしては統治がうまく

行かぬ。もとい統治者によつて常人不
の。主権とは統治は人民の爲と云ふ
事には見せかけするが如きなり。
新治の民権的になり主権とは勝手
にふくまへなれた。こんな人主権
をいふ。もしも主権をいふはあつた
に於いて来た。わが國の既成の民
の人格の完成とが道義の維持を
求むるより多きものになつた。
然し主権者絶対的な武力は今日
では存在するところ。乱暴に解
了。人が少なくなつた。

今では口宗の組織統治の機構
は他人の手に既に決まされてしま
う。そこで人はその機構の何れか
の部分につく。その組織の基礎を
他人の力で変更する事は強て
難く、他人の手に既に決定して
立して居る状態をいふ意を以て
この組織は他人の手にあつて
有。他人におくたへはつて。言語
が他人をその中に強制し、隷属
せしめて居ると同様、口宗組織
もそれである。

防衛の目的は、
国家の安全を
保つことである。
これは、
国家の存続
に必要である。

口民は、
国家の安全
を保つため
に、
国家の存続
に必要である。

口民の最も重要な
防衛は、
国家の安全を
保つことである。

これは、
国家の存続
に必要である。

の自利的生活の
ためである。

口民統治の
目的は、
国家の安全を
保つことである。

文化として
残存する
ものがある。

口民統治は、
国家の安全を
保つことである。

口民の
利益は、
国家の安全を
保つことである。

口民の
利益は、
国家の安全を
保つことである。

口民の
利益は、
国家の安全を
保つことである。

口民の
利益は、
国家の安全を
保つことである。

口民の
利益は、
国家の安全を
保つことである。

口民の
利益は、
国家の安全を
保つことである。

口家ハ口民をよに對して法秩を
の維持にまへし武力によつて法秩を
の維持をせしむるは口家
ハ武力の組織体として口民には
口家ハ武力の組織体
であるから口家ハ口民は野
蠻の野蠻の國に對する世界に
けし口家群はそんな相互國に
もしも口家ハ口民が長い個人同
先づの世界であつて道義と文徳
甚しく家群も口家の出来
であつたから口家の縁は甚く高

林内
74
PL6
の
を
す

地 方 司 政 司 長 官 署

[illegible]

左
好
は
多
い
で
あ
る
う。

千年の
か
一
舟の
口
匠
粗
糸
粗
糸

に
か
ん
に
て
み
え
い
か
ろ
ス
器
や
金
銀
の

器具を同一の
部中の各
部を用いて

片古化の遺物は、君王の宗廟に

力如何
勝年久
偶生此
病。

乃
L
か
A
P
C
方
J

40213

い
あ
あ
あ
か
近
時
わ
控
り
が
う
い

10/1
10
14
勤
加
漸
改
多
く
休
み
あ
る

零に口承は口ゆの12名の要

が隣人として思ふ所の

世
子
三
二
一
定
現
レ
上
世
多
ク
ア
ル

徳川幕府に
口説き廻す
女共

2. 爲心軍隊互禁
流

新
着
の
一
冊
が
多
数
有
り

系
し
187
財
支
配
15
有
子
1
15

子
方
一
信
知
子
子
子
子
子

良知的
口氣
清機
拂人
回

化の中心路線をたどるべきである。

基礎

東京 特設都市計画

（東京は有数の経済都市）

西村

家族の動向も、戸籍も異なり

（東京は本来悪党が絶えぬ大都会）

武蔵野線と都営丸の内線

（東京は強制的な都市計画）

（東京は強制的な都市計画）

（東京は強制的な都市計画）

（東京は強制的な都市計画）

（東京は強制的な都市計画）

（東京は強制的な都市計画）

（東京は強制的な都市計画）

（東京は強制的な都市計画）

（相互に野郎や狐の国）

（相互に野郎や狐の国）

（相互に野郎や狐の国）

（東京は強制的な都市計画）

（東京は強制的な都市計画）

（東京は強制的な都市計画）

（東京は強制的な都市計画）

（東京は強制的な都市計画）

（東京は強制的な都市計画）

（東京は強制的な都市計画）

（東京は強制的な都市計画）

契約法と有機体説

多々利の宗族と家族主義の宗族

△の家が他人に先だて存す。ま

と云ふ有機体説の主張は存す

である。又△の家は既に契約

して、ある組織である。それゆゑ

かである。一切の差違を予想する。

△の家は其の素について十分の

正當な契約をすればよいのである。

△の家は其の素である。ある。

ある。△の家は其の素である。ある。

①

契約法と多々利の宗族の批判

史実として△の家が契約によつて成立し

たとへる。△の家は其の素である。

△の家は其の素である。ある。

△の家は其の素である。ある。

△の家は其の素である。ある。

△の家は其の素である。ある。

△の家は其の素である。ある。

△の家は其の素である。ある。

△の家は其の素である。ある。

△の家は其の素である。ある。

△の家は其の素である。ある。

△の家は其の素である。ある。

である。国家として人がその地位にある。

ゆゑに、~~ある~~なると有機的協力を示す。

も、~~その~~人々の地位は皆漸進的

である。地位の組織は、や、国家的

ではあるけれども、~~その~~変化に国家的でない

部分の協力を有する。これは、~~その~~人々の

協力は力の差があるけれども、~~その~~可能である。

弱い方が泣き寝入りすれば、~~その~~可能

である。

多量的に要求は、~~その~~地位は、~~その~~地位

の一つの部分に過ぎない。その下にある

秩序と階級の為の階級社会である。

である。

他の部分に之の上に冠して之を稱は
るべしはたふめと云ふ。その意味は
多量物の名は正し。然しこの
言葉と云ふは其の目的が殊多
く、殊多と云ふは其の武力をもつもの
にあらざるは其の記号が異なる。
又當てお制するが如しと云ふのは
其事を継承してゐるに云ふ多くの
名に於ては、其の事も忘るべき
なり。何より弱兵は口家かまづ
其力の分析のなり。口家
の金係主の口家は口家

は口内の一印の社会活動の上にあ
る指揮命令するべきものと見よ。
口内の社会活動は、口内の常態に
あつたものにはないものと見て獨
裁を主張し、近づくところもある。

秩序の防衛の解任は、口内の
秩序の解任は、口内の秩序の解任
と下すのは、口内の秩序の解任は、
口内の秩序の解任は、口内の秩序の解任

口内の秩序の解任は、口内の秩序の解任
口内の秩序の解任は、口内の秩序の解任
口内の秩序の解任は、口内の秩序の解任

口内の秩序の解任は、口内の秩序の解任
口内の秩序の解任は、口内の秩序の解任
口内の秩序の解任は、口内の秩序の解任

政治と武力の完全分離

この點に當る。色々の點に當る
えて秩序が亂れれば政府の統制
が失われ武力が當る又同様に

九月四日、尾崎の
口説きを聞きし

口民社会は皆仁徳を以て治る

本米の政治体制は其の民の政治体制に依る。政治体制

其の昔の政治体制は其の民の政治体制に依る。政治体制

民の政治体制は其の民の政治体制に依る。政治体制

民の政治体制は其の民の政治体制に依る。政治体制

民の政治体制は其の民の政治体制に依る。政治体制

民の政治体制は其の民の政治体制に依る。政治体制

民の政治体制は其の民の政治体制に依る。政治体制

民の政治体制は其の民の政治体制に依る。政治体制

民の政治体制は其の民の政治体制に依る。政治体制

民の政治体制は其の民の政治体制に依る。政治体制

420
我の實現レ方には異つて程々の困難
がせかあり、それを先きに考慮
すべきである。

(首都悦びつゝ者(天城山に
到達した一つの主張。一八一
35)

口境を越え下井(市)低や同仙

(一) 民族は皆伝統的文化をもち、
 生活は皆、その文化の根柢を
 守り、その文化の発展を期す。

民衆の
d
d
江
地
の
民
衆
の
民
衆

この世は

「開口成
意を以て
述べて上
下は固
体也
此の固
体が

すゝもみ屋であのそこの近

卷之四

一、字、教、用、何、の、通、つ、案、の、活、動

二、
和
子
國
超
一
九
七
五

三、藝術的反映

四、考察 地方 行政 建設 調查 報告

五、江蘇省運部的近(二)年的活動

不
明
の
理
由
泉
の
味
味
味
味

いそ

是
 には
 其の
 自
 え
 の
 寸
 節
 が
 危
 眞
 せ
 ら
 れ
 る

の
た
い
際
に
何
れ
の
方
面
の
口
際
的
結
合

文選

[illegible]

はなつたつのか、治をに對する御意の
いふ字は治をに自分のゆかゝりあり
民のゆかに平和を致せんとする意の
意のゆかに然し治をに少くとも
民の教をいふ人だ教をいふ可
か初をいふか初をいふか初をいふ
は初をいふか初をいふか初をいふ
たい日治をいふか初をいふか初をいふ

本國家の起源の著者井上光貞氏曰く

本人の起源の問題は日本民族の成立とは

であり、そして日本の国家の起源とはまた

別の事情である。

通常、国家は民族・領土・統治組織の三つの

要素から成り立つ、といわれるが、国家とは

領土といふ、その意識が成立した

は世界史的にみても十九世紀以後のことでは

ない。そういう三つの要素をさへえた国家

は近代の国家としてある。したがって、国家

の成立とは近代の国家の成立のことである。

解するのには厳密であり、かつ正確である。

是者は

近代国家の成立の起源の時と云ふことは

四七二頁よかて、世界史には十六世紀以降

と云ふか、日本の場合は何時にかんして然る

しなり是よのかと云ふ

日本国家の起源という場合に、さう考へられ

といふことは、氏・部・領土および政治組織の三

要素からなる国家の成立と云ふことである。この

点でなくとも、右に述べたような意味に於

いて政治組織の成立と云ふことである。この

政治組織の成立はさながら日本国家の成

立ではない。しかし日本人の考えでなくして

日本国家の成立は、この時点から考へるに

これという意味に於いてそれは歴史を考へ

ての日本国家の成立と云ふことである。この

あし 5-6

石田英一郎氏は日本民族の起源を論じてある

それ故のこの最大の人同集団の關係
は民族ではなく口民族である。ま
いに民族の残影が民族である。

論考に民族とは「一定の地域に占拠する共同
の生活を営むことによつて、言語、信仰その他
の種々の文化要素の全部もしくは大部分を
共有し、同一の歴史と傳統と運命のことに
われわれ」という要素の集団の關係、感懐
によつて結ばれるようになった人同集団の最大の
要素である」と述べている。R6
この十分に肯肯である觀念からすると、日本
民族の成立は日本人の起源の同じとより
も、日本口衆の起源の同じとばかりに密
接に結びつてゐることをわかつた。日本人が
たゞいに「われわれ」という共通の集団に

府、感情をもつてゐる。たゞ、昔とさかの
ほつては、日本人が一つの経済機關の如くに
組織されるは、いまだ、時代より、前ではある
云ふものの、あゝ、それだから、石田氏も、さうい
つづけて「日本」のような島國では、日本
の統一と云ふに、よゝ交通網の拡大と云ふ、
比較的容易に、各種の地方の部落を
互一の民族にまで融合せしめたと述べて
いるのは、いさゝかうなつてゐる。日本
人の起源が何れは、日本民族の起源と
いふ、かえてもよいかもしれなかつた。しかし日本民
族の成立ということになると、その場合には

は日本に一つの大きく統治組織の作り
れた時こそ、決定的に重要なる意味を有

てゐるのである。――附録 7

井上氏は日本人の起源と日本民族の
起源を日本列島の起源とを分けて考へ
てその考へを最終に整理して居る。

口氏の概念については後の章に述べて居る。

この統治機構の中心に組織づけられた

いふことも、その組織が今日の日本の形に緊密な

ものでなつたことももちろんである。そしてその

統治機構の中心に組織づけられた国民は、口氏

としての連帯意識や経済の概念をもつてい

たとへば考へてゐた。口説き合ひの意は、
領土の地名がうすれたのは、たとえば、
整束のようだが、外に危機にさらされた時
一般には、はやや欧米流の面もある。こ
うしてなつては、戸部中期以降のことと
あつたらう。P.5

しかし日本の中核をなす地帯が大部分
か、二つの経済圏の間に組織づけられる
のは、それよりずっと前のことなのである。この
経済組織はその後拡大され、下地の動きに
従つてその値を変え、時には分離した。
しかし大勢として、一貫して今に至つてい

のである。』P.5

「日本国家の起源という場合には、ふつう

考えておいていことは、近代国家の成立

とはなしてない。述べたような意味にはあけ

統制組織の出現ということである。この統制

組織の成立はすなわち日本国家の成立

ではない。しかし日本人の歴史をみれば、

日本国家の成立はこの時よりある。それは

いめいれ、という意味においてそれは、~~歴~~歴史的

な意味での日本国家の起源をいっている。

「これもよいのである。」5-6

井上光房著の日本の花道（岩波新書）
の書評

日本人、日本民族、日本國家、日本國民、種々の別
光貞（金作記分と口述の別）
上段の考へは大方一に妥協であるか

私の考と

口氏としての書風

口は自分の良心を
かくしてゐる。

3

井上氏が榎令四石を蔵すを以て

概名として呼ばれたものは

日本人、日本民族、日本国、日本統治機構

日本人口本銀土

この法
租金
の外
に
口
民
衆
の
租
金
か
け
を

10

片
の
つぎ
と
お
ひ
の
か
た
て
に
本
屋
で
文
の

第一、法律上の日本国民の上に形成さ
れて居る。第二、日本の統治組織が統
治の對象として居る人の上から成つて居る。
日本国家を形成する人間的要素は、
第一、~~政治的~~統一的である。
日本民族の中心は、^{日本領土}日本領土に在り、
人々もあつて、^{日本領土}日本国民ではないが
日本民族である。日本国民は日本領土に在り、
第一、^{日本領土}日本領土に在り、^{日本領土}日本領土に在り、
第二、^{日本領土}日本領土に在り、^{日本領土}日本領土に在り、
台湾民族も在り、^{日本領土}日本領土に在り、
朝鮮民族も在り、^{日本領土}日本領土に在り、